

山形県のほぼ中央に位置する西川町は、豊かな自然がある山間部を抱え、同時に近隣市町村の貴重な水源地ともなっている地域である。四季折々に現われる自然は、町内外、また、県内外の多くの人々に、雄大で壮大な自然景観を見事に演じてくれる。また、一方では、高速交通網も整備され、これまで以上に地域が活性化する条件は揃ってきた。しかし、町の現状を見ると少子化や高齢化が進み、若者の就労場所が減少し勢いが失われつつあるように感じられる。豊富な地域資源が十分に生かされていないことは、2年前から地域等の事業に参画、支援することが増えてきた私から見ると、ただ一言「もったいない」である。

そんな当方の思いから“提案”という形で町が今年度運用開始したのが「バーチャルタウンにしかわ」である。「バーチャルタウン」といわれるたぐいは、日本国内で10数件を数える。決して目新しい取り組みではない。要は、仮想空間いわゆるインターネットを介して、“バーチャル(仮想の)町(タウン)”を構成し、時間や地域にとらわれずさまざまな活動、情報交換を行い、利便性を高め、地域の活性化、また、多くの広がりを作り出そうということである。情報化社会が叫ばれている中で、単に表面上の情報化ではなく、必要とされている内容、必要とされている仕組みを構築することを目指している。

バーチャルタウンは、構想を理解し構築することも大変であるが、運営し、普及させることはそれ以上に大変である。何故なら、魅力のないところ(場所)には誰も訪れないという、仮想であろうと現実であろうと変わらぬ厳しい評価があるからである。西川町を舞台に、敢えて仮想空間に町(タウン)を設置した背景には、多くの含みがある。豊かな自然環境に目を向けると、地域を利活用する人々は、相変わらず減ることなく存在する。ここで、利活用者と地域をもっと密接に結びつけることで地域を活性化できるのではないかと予測した。即ち、バーチャルという手法を使えば、たとえこの町に住んでいなくとも、何かしら協力、支援してもらえるようになるのではないかと考えた。逆に、協力、支援してもらった代償に、町に来た際は、「町民」同様に町の魅力を利活用いただき、「良かった」と感じてもらい、双方にメリットがあるようにできないかと発想した。

月山をはじめとする山々、渓谷、河川、そして山岳信仰としての拠点、古くからの交通の要としての

街道文化、そして、全国でも有数の山菜産出地と、このように幅の広い資源を抱える地域は稀である。また、世界でも数カ所あるだけの「サーフ&スノー」エリアがある。これは、夏と冬のレクリエーションと一緒に堪能できることを意味する。月山は夏スキーを楽しみ、また、水辺のスポーツ(カヌー、ヨット、ジェットスキー等)も一緒にの時期に味わうことができる。多くの地域資源を持つこの地域は、資源の多さに比例するように楽しみ方も多いわけで、幅の広い利用者層が存在する。

そこで、バーチャルである。

VALUE SIGHT

情報通信で自然と共存 資源を生かし地域活性化 「バーチャルタウンにしかわ」

西川町がインターネット利用の新たなシステム「バーチャルタウンにしかわ」を立ち上げた。町外の西川町ファンを仮想住民に見立て豊かな自然などに関する情報交換等を行い、地域を活性化しようという挑戦である。その仕掛け人、堀清人氏に趣旨を述べてもらった。

情報通信技術と通信回線の大幅な普及に伴い、情報の受発信に大きな効果が期待できることは確実である。また、携帯電話も大きな利用度があり、これらの対応も含めてバーチャルタウンの領域となる。利用者は、興味のあることに関して、より鮮度の高い新鮮な情報を欲しており、利用頻度や内容が深くなればなるほどその度合いは高まる。利用者に対してサービスするには、相応に情報の管理が必要になってくる。バーチャルタウンによるサービスによって情報の整理整頓が進み、一時的な集中作業はあるにしろ、むしろ情報の一元化がはかれ、より効率的な管理がかなうのである。個々人の情報がバラバラに管理されるより、西川町の地域情報を一元管理でき、それが多くの人で共有され、時には二次利

用がなれば、利用者側には格段のサービス向上と映る。バーチャルタウンとは、そのような情報の受発信拠点としての役割を担うのである。情報は、産業の原点であり、バーチャルタウンによる情報サービスは総合サービスと進化し、総合サービスは総合産業の元となる可能性を秘める。

さて、ここでもう一つの大きな役割を担うのがバーチャルタウンの「住民」としての「仮想住民」という考え方である。西川町の町民も仮想住民に含まれるのはもちろん、多くは町外者



バーチャルタウンにししかわ <http://www.e-gassan.com>

きる仕組みをつくれば良い。

今回、短期間ではあったが「バーチャルタウンにししかわ」で仮想住民になる希望者を募ったところ100名を超える登録があった。当初の予想通り、町外から多くの参加をいただいた。情報の受発信の整備をさらに進めれば、より多くの参加が見込める。そのためには、地域の資源を改めて見直し現状がどうなっているのか多角的に検討することが不可欠である。何も目新しいことをするわけではない。皆で、整理整頓をやってみようということである。

殺伐とした社会において、時間、空間の衣替えができる西川町は貴重な存在である。その空間である「バーチャルタウンにししかわ」でつながることは計り知れない深さがある。同じ地域で結ばれる、違った生活空間の人々。いろいろな経験、知識を、そして活動を持ち寄って楽しめるのがバーチャルタウンである。今年度、第一歩を踏み出した「バーチャルタウンにししかわ」は、来年度に向けて次ぎの一手を着々と準備中である。興味、関心のある方は是非参加いただきたい。

堀 清人 (ほり・きよと)

大学研究員。民間企業を経て、現在大学において研究活動中。専門は情報産業デザイン、環境コーディネーション。地域においては、NPO活動の推進、地域活動の推進を支援。山形県地域総合サイトyamagata(<http://yamagata1.jp>)の企画運営担当、およびwebmaster、地域情報支援団体NPOやまがたネット(<http://www.yamagata-net.jp>)代表。

村山



NPOやまがたネット
代表

堀 清人

を想定している。町内には限りがあるが、町外に範囲を移せば限りがない。それら限定されない数値が大きな地域活性化の原動力になる。魅力とは、高価なものがあるということではなく、体験したり、感動できる何かがあるということである。魅力があればこそリピーターとなり、地域とより深いつながりとなる。

その魅力を紐解けば、お金で何とかなる代物ではなく、景観、環境といった地域特有の空間、時間に起因するもので、その場で、その時間でしか体験、体感することができないものである。この価値を理解している人であればこそ、先に述べたように協力、支援をお願いできる。地域に人手がなければ、町外にいる多くの利用者の方々と手を取り合って対応で